大会記録で初優勝

2日目に1ラウンド3イーグル

《２０２５九州オープン選手権》

通算１９アンダー　２６９

三重野　里斗（Ｔ・ｈｅａｒｔｓ）

【写真は特別協賛の「えんホールディングス」の原田社長㊧から優勝副賞の２００万円の目録を贈呈される三重野㊨】

最終１８番のバーディーパットを決めた後、三重野には大量のウオーターシャワーの祝福が待っていた。「想像以上に水が冷たかった。溺れるかと思った」と大きな笑顔もびしょびしょに濡れた。

　これまで宮里優作の持つ大会記録の１５アンダー（２０１３年のパサージュ琴海、パ

ー７１）を更新する１９アンダー。初日から６９・６３・６７・７０。圧巻は２日目だった。１、５、１８番の３ロングホールでイーグル。１ラウンド３イーグルはプライベートでは１度あるが、試合では始めて。男子ツアーでも詳細な記録の残る１９８５年以降、９人しかいない記録である。大会４日間のロングではボギーは１個もなく４イーグル、８バーディーのトータル１６アンダー。三重野のためのロングホールだった。

もちろん、いいことばかりではない。ピンチもあった。最終日の８番ミドル。第１打が左ラフに行くが、「大きな穴の中に入っていて出すだけ」。３打目はグリーンオーバーして、逆目のライからのアプローチも寄らずにカップまで５ｍ。このボギーパットを見事に沈めた。「俺にとってはバーディーみたいだった。これで『俺は行ける』とね」。そのままゴールへと突き進んだ。

「今大会は気持ちも乗っていた。『俺は最高、俺は行ける』となぜかそう思って。自然と終わった瞬間をイメージしたりしていた」。それだけ調子も良かったのである。その大きな１つの要因がラウンド増。知人らからの誘いもあって、最近は週３～４回になることも。以前は月１の時もあった。それで何が良くなったか。「こうやったらミスをするんだ、ということが分かり、それを潰している」。多くの実戦を積むことで１歩ずつ前進している。具体的にはアドレスの際、右を向くクセがあるという。その修正として左を向くように意識している。

三重野のゴルフは今時珍しい感覚派。距離計測器も使わなければ、ヤーデージブックも持たない。見た感じでクラブを選び、迷わず打って行く。「視力は２・０で目もいいし、３００ヤード先のボールの字も見えます」と笑い飛ばす。攻める場面と無理しないホールを直感的に判断してプレーする。今回は見事にはまった。

これまで２位が２度の今大会を初制覇し、５人目の九州オープン＆九州アマチュア優勝者となった。「これまで１日、２日間競技で勝ったことはあるけど、４日間は初めて。最高！」と声も弾む。２０１０年の九州アマ（宮崎レイクサイド）を制した時は沖学園高１年。いまだに破られていない最年少記録として残る。この優勝後にプレゼントされたパター（オデッセイのピンタイプ）を今もずっと使用している。三重野の大事なアイテムである。その相棒とともに臨む１０月の日本オープン。「これまで３～４回出ているけど、１度も予選を通っていない。とにかく予選を通過したい」とこちらも初を目指す。

《ベストアマチュア》

同志社大４年の下園航太（鷹羽ロイヤル）がエナジックスポーツ高２年の呉屋陽星（カヌチャ）とのプレーオフの末、ベストアマチュアに輝いた。１番から始まったプレーオフは４ホール目の４番ミドルで決着。下園が３ｍのバーディーパットを沈めて呉屋を振り切った。「朝回った時と同じラインだったので、なぞるようにして打ちました」。ただ、ベストアマを手にしたと言っても、下園にはそれほどの感激はない。それは日本オープンの最終予選に出場できる上位５人の枠に入れなかったからだ。３日目に６４をマークして一気に８位タイまで浮上。目標を狙える位置まで来たが、最終日はパープレーで１３位タイに順位を落とした。「届かなかったので悔しい」と表情を曇らせた。今後もまだチャンスがあるだけに「プロに混じっての試合はレベルの高い方に引っ張られるし、勉強になる。最終予選に出られるように頑張りたい」と諦めてはいない。玄海ＧＣは２０２９年の日本オープン開催も決まっている。「プロとして、ここの日本オープンに出場できるようになりたい」と４年後を見据えた。

【玄海ゴルフクラブ】